

「失われた街」模型復元プロジェクト

Lost Homes Project

槻橋修 Osamu Tsukihashi

復元模型と記憶の再構築

東日本大震災とそれに伴う大津波によって失われた街並みを、全国の建築学生のボランティアによって縮尺1/500の復元模型として再現する「『失われた街』模型復元プロジェクト」は、発災直後の2011年3月25日に構想が生まれ、現在に至るまで、岩手・宮城・福島各被災地の被災前の街並みを白い復元模型によって再現してきた。ひとつの模型はそれぞれ1×1mの正方形で500m四方のエリアをカバーする。これを1ピクセルとして、南北約500kmにおよぶ津波被災地の在りし日の姿を制作し、2011年の春から2013年末までに206ピクセル、34地域の模型を制作してきた。制作したのは24大学の建築デザイン系研究室の学生たちで、総勢500名以上の学生が参加した。

3年目となった2013年は、いよいよ制作した模型を沿岸部の被災地に持参し、現地の人々に披露し、模型の上にかつての街の思い出を語ってもらいながら白い模型に彩りを加えていく活動が本格化した。2013年1月より岩手県の沿岸部10カ所で月に一度のペースで行った現地WS「記憶の街ワークショップ いわて・ふるさとの記憶シリーズ」では、NHK盛岡放送局の協力を得て毎月一カ所、ワークショップの様様とともに各地の思い出と人々が復興へと向かう様子を番組として放映した。それによって、活動を東北の人々に広く知っていただく機会を得、建築学生たちと地域の人々との心の交流も深めることができた。このシリーズでは計10回のワークショップで合計5,400名を超す来場者が会場を訪れ、模型を前にさまざまな地域の思い出を語った。語られた記憶のうち、短いものは「記憶の

旗」という透明な旗に記入して直接模型上に立て、それに収まらない長い語りは「つぶやきシート」に記録している。ワークショップを終えた復元模型は、「毎朝の散歩コースだった」「船の上でかけるレコードが鳴り響いていた」「軒先に干したイカの匂い」といった街の生き生きとした情景によって彩られた。

約3年間にわたって継続してきた経験から、このプロジェクトは〈復元模型による被災地理解〉〈場所の記憶を介したコミュニケーション〉〈記憶の再構築〉という三つの側面から特徴付けることができると思う。まず、〈復元模型による被災地理解〉については、被災地にとって外部者である建築学生らが被災前の街並みのジオラマ模型を制作することにより、被災地を空間的に理解するということだ。学生は支援のために被災地に入ったとしても、やはりそこから学ばせてもらっていることには変わらない。度が過ぎた学生の投入は被災地にとってかえって迷惑となる場合すらある。専門性として未熟であっても被災地の空間を理解していくことでまず地域に礼を尽くし、被災地との関係構築の足がかりを得ることができる。第二に〈場所の記憶を介したコミュニケーション〉に関しては、現地に持参した白いジオラマ模型を囲み、学生たち自身が住民たちから街の思い出を聞く。「あなたの家はどこでしたか?」「印象に残っている場所はありますか?」といった簡単な質問から始めるが、来場者は模型上での場所と記憶のなかの場所のすり合わせに成功すると、次々と街の情報を学

神戸大学大学院工学研究科建築学専攻准教授／1968年富山県生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。東京大学大学院修士課程修了。同、博士課程単位取得後退学。東京大学生産技術研究所・助手、東北工業大学・講師を経て現職。ティーハウス建築設計事務所を主宰



図1 田老でのワークショップ風景(2013年4月、立命館大学宗本研究室) [撮影: Jason Halayko]

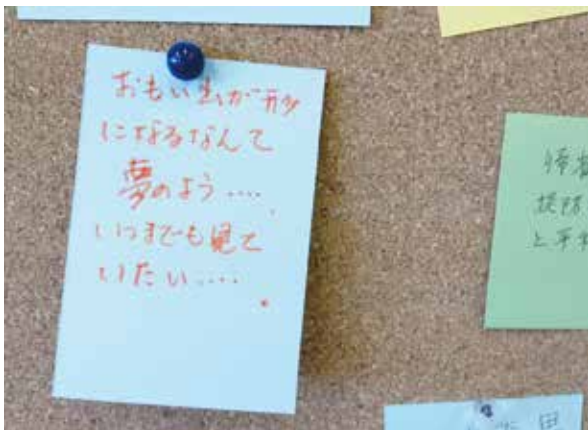


図2 展示会場に寄せられた来場者からの感想(山田町WS)



図3 旗「社内恋愛の聖地」(陸前高田WS) [撮影: 藤井達也]

生たちに説明してくれるようになる。模型を囲んで近所の人同士が話し始めると、ひとりでは思い出せなかったことまで飛び出し、場所の記憶を介したコミュニケーションが生まれる。白模型を制作した段階では再現しきれなかった時計台や桜並木、お地藏様といった、地域のランドマークを住民たちの記憶をたよりに学生がその場で作成する。展示会形式で1週間ほどワークショップを開催すると、復元模型は地域の思い出によって満たされ、学生と住民たちとの協同制作の作品と化す。模型の前で語り、色を塗り、記憶の旗を立てる単純な作業には、老若男女、誰でも参加することができ、参加の度合いも住民たちが自ら選択できる。一つひとつは小さな記憶の点でも、それが集まることで白い模型の上に思い出のモザイクのような街並みが出現する過程を見ると、地域空間の模型を超えて、地域社会そのものの模型のようにも見えてくる。そして、この模型の上で語られた思い出を記録し整理しておくことが〈記憶の再構築〉につながると考えるのである。

「集合的記憶」の提唱者であるフランスの社会学者M・アルヴァックスは、個人的記憶が社会の記憶と不可分であり、集合的記憶が社会の空間的枠組みを参照することで成り立ち、社会的空間が記憶

にイメージを与えるのだと論じている。「記憶の街ワークショップ」を通じて感じたことは、物理的な街が失われても、一人ひとりの記憶は失われていないのだから、街の空間の代理表象となる模型を介することで、部分的であれ地域社会の集合的記憶の再構築ができるのではないかと、そして、集合的記憶の再構築は翻って一人ひとりの心の再生につながるのではないかと、ということである。そのためにも、「旗」や「つばやき」として収集された記憶のアーカイブを今後どのように活用していくかは、私たちにとって目の下最重要課題である。

記憶から見えてくる地域のcommons

「記憶の街ワークショップ いわて・ふるさとの記憶シリーズ」で復元模型の上に立てられた「記憶の旗」は、10回のワークショップで制作された全92ピクセルに対して約1万5千本(1ピクセル当たり平均約167本)、語られた「つばやき」は総計約5,000件集まった。被災前の街でそこに生活していた人々の記憶の総体からすれば、ほんのわずかな断片の集まりに過ぎない。それでもこれらの記憶の断片から立ちのぼってくる街の豊かな表情は、音や匂い、温度や明暗といった地域固有の質感を伝える。季節ごとの祭り

の様子や自然との向き合い方など、三陸の山々と海に囲まれて、人々がどのように空間を営んできたのか、小さな記憶の集まりからうかがい知ることができる。たとえ暮らしていた街が物理的に失われても、街に宿っていた豊かな質は人々の記憶によって生き生きとよみがえらせることができる。その土地に幾重にも積み重ねられ、維持されてきた地域のcommonsはこれから再生していく新しい街に引き継いでいくことができるのだと、実感することができる。こうした感覚を、学生たちと住民の間で共有できることが「失われた街」模型復元プロジェクトにおける最大のブレイクスルーであろう。

注

- *1 プロジェクトWEBサイト：<http://www.losthomes.jp>
- *2 震災前の岩手県沿岸部の再現模型等を展示(全106ピクセルを予定)
 「ふるさとの記憶」——いわて 失われた街 模型復元プロジェクト展 特別展
 会期：平成26年3月1日(土)～3月16日(日)
 会場：いわて県民情報交流センター アイーナ(盛岡市盛岡駅西通1-7-1)
 4F県民プラザ、5Fギャラリーアイーナほか
 主催：NHK盛岡放送局、「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会
 共催：岩手県盛岡広域振興局
 監修：神戸大学 機構研究室
 協力：早稲田大学古谷研究室、名古屋市立大学久野研究室、愛知淑徳大学清水研究室、立命館大学宗本研究室、神戸大学近藤研究室、東北工業大学学生有志団体colors、神奈川大学曾我部研究室、京都造形芸術大学中村研究室、一般社団法人アーキエイド
 開館時間：午前9時～午後6時
 (※期間中無休、最終入場午後5時30分)
 入場料：無料